



孫本甲城軍記三編
六

遠東
2258
30



13
2258
30

池清



繪本甲越軍記三編卷之六

曲測まがら雜言ざうごん之の事こと

曲測まがら在あ在ら清門せいもん憤怒おんぬ之の圖ず

落合おちあ彦助ひこすけ之の事こと

落合おちあ昆沙門こんさもん堂どう之の事こと

落合おちあ彦助ひこすけ仙海せんかい法印ぽういん小令しょうりやう之の事こと

長坂ながさか源げん又また郎らう落合おちあをを瞞あざむくこと

彦助ひこすけ平へい三郎ざうらうとと祢ねらら小こ圖ず

落合おちあ彦助ひこすけ金丸きんまる平へい三郎ざうらうとと射う事こと

日越軍記三編卷之六

敵



繪本甲越軍紀三編卷之六

衆兵之必察正馬 衆兵之必察正馬

ある武達名譽の者あれども理能の事小ら貪る者なく已む
ガ心の強みもあはれいと昆虫とも思はざり大膽不敵の男あれは
他と争論する事度りて折へる及び事七十四度あり其内
一度は勝一度は扱あり其餘は皆負小なる曲測或時又
偽軍と争論と仕出し身言罵り果は双方に親しき人々
種々小扱し省きとも執拗めて聞入らば竟小折及ぬ元春
曲測が能分小宛とてた在衛門折はも仕負て腹とて度とて
として大言小折度の論ら其負中よきもの各方向信とて

剛在衛門事ハ極レ

頃



荒川村井乃両士偽く彦助が首と実檢入圖
武田大膳太丈暗信ヲ羅髪之車
暗信ヲ羅髪之車

敵

武蔵守 必察馬 衆好之 必察馬 此曲測 在左衛門 事ハ 爲レ

繪本甲越軍紀三編卷之六

曲測雜言之事

頓

武蔵守 必察馬 衆好之 必察馬 此曲測 在左衛門 事ハ 爲レ
 ガ心 欲ハ 亦 衆好之 必察馬 此曲測 在左衛門 事ハ 爲レ
 他ト 争論 事 度 事 七十四度 あり 其内
 一度 勝 一度 扱 あり 其内 皆 負 小 あり 曲測 或 時 又
 傷 軍 事 論 仕 出 身 言 罵 果 以 双 方 対 親 小 人
 種 小 扱 小 者 也 執 抑 あり 聞 入 小 見 小 種 及 び ぬ 元 來
 曲測 小 扱 小 者 也 執 抑 あり 聞 入 小 見 小 種 及 び ぬ 元 來
 して 大 音 小 扱 度 論 其 負 中 小 扱 事 各 方 音 行 論



荒川村井乃西士 爲 秀助 首 實 檢 入 圖
 武田大膳 太 丈 暗 信 衆 難 鬚 之 事
 晴 信 弟 鬚 之 圖

曲測 雜 言 之 事
 繪 本 甲 越 軍 紀 三 編 卷 之 六



甲越軍記三編卷六

曲淵庄左エ門
憤怒之圖



甲越軍記三編卷六

ざりふは論は仕負つる重く称へるんどもあるは粟柿と因縁
 持る系をくひあり時小某が在る醜材に上巧うては程の事
 持系をべしと罵らるれども彼有るんと時信の愛し孫者
 あれば口と縛る物も言ざりしが搦井安藤守を小身あれ
 ども時信ととも近死親屬あれば腹小は曲測敵を比
 勿体ある事とやと物物り交う上と軽んじて後た振の沙
 汰もあふきあり是ほど沖令ゆき河家にて近固他は近
 も文武二道の譽ある大將のついでた振の陰悪ことと
 仕べくいや多称て折へるん中ら理究と持系りなきありを
 理ある事はいづれ根束錢と車小務ぐ系うる共其方
 け負うるべしと荒らうふひりら曲測傍の人々又對ひて

とつぎ鐘ぐら搦井徹小と沖位と沖出頭と某参りこら
 とも切合中ら勝ぐの間は勝く思ふも只今身へ沖出は場中て
 志や首と斬碑いと進とべしと罵りあがらと搦迫し座と登
 とまぐまは流石大割の曲測あれば雅有る支の者あり
 上と急ぐ故かく容不は母一ぬ搦井安藤守ら曲測が難
 言と腹は其系今福澤宗武孫三河守とお連る時信の
 弟は出折へ有る小父ら孫と時信と目早く見孫は惡逆の者
 有る事の破を狼藉もや有るんと不審しく思ひて搦井
 安河車は有るやと言とる時孫へは三人の氣をたおかくは
 開ると搦井安藤守孫と進今日曲測が上と愚淺はかき茶等
 が判罰と湖系罪甚軽うて早く渠と飛一孫はぐん某等

が河役と免させ給ふべしと涙と落して申されたるは時信と曲
 測が争論の流石雜言の中條一と小ばしりし何れ其方が中分
 道理至極せり一族と親役と云所方が國中於二代はは
 廿七代は傳る大將あり其當時其方と小意外も有るも
 あれ曲測厨も昨日今日まで板垣が小者との者ありしと組はは
 り預けを上も只今もと仕上るる方とて小身の者なれば其系
 者として教ふべき小某が一族なり其方小雜言と中條且も某
 と輕しめたる所ありたれども彼曲測中子細あり一と板垣流
 治郎と本郷八郎を本門が小身ありと慢く意外せり一と某
 門横と板垣と切付麻と夢とめぬ外も大小小の如く
 我國の製度あれば意根の子細種々ぬれ聞ありも依

かりんと手と迫り聞は本郷八郎を本門利多ある上ありとお
 多板垣あれば仕付の者小本郷と産種小取筆を某と曲測
 某と依結の法と存に本郷と死せざる眼と我と根由其油
 活層もあし其時と罪小も終べきと思ひしが終く考ふる
 以て小者より義理と存優き志と感と居間近く呼ぶと小
 對面し板垣も當座の主甲州一國の者も皆我譜代あり練の
 主と我あり事と添しられ彼者涙と下し誓紙と仕て
 ぬしぬ又上州波を産合戦のにたり和田八郎が主人板垣
 と三郎頭一と曲測頭二箇何れも名譽を以て撫あり其
 名あり板垣谷と上州新来の者なれば磨養として刀と取せ
 曲測も譜代あり故心易く思ひ脇指と取せしと板垣あり

日武軍記三編卷六

四

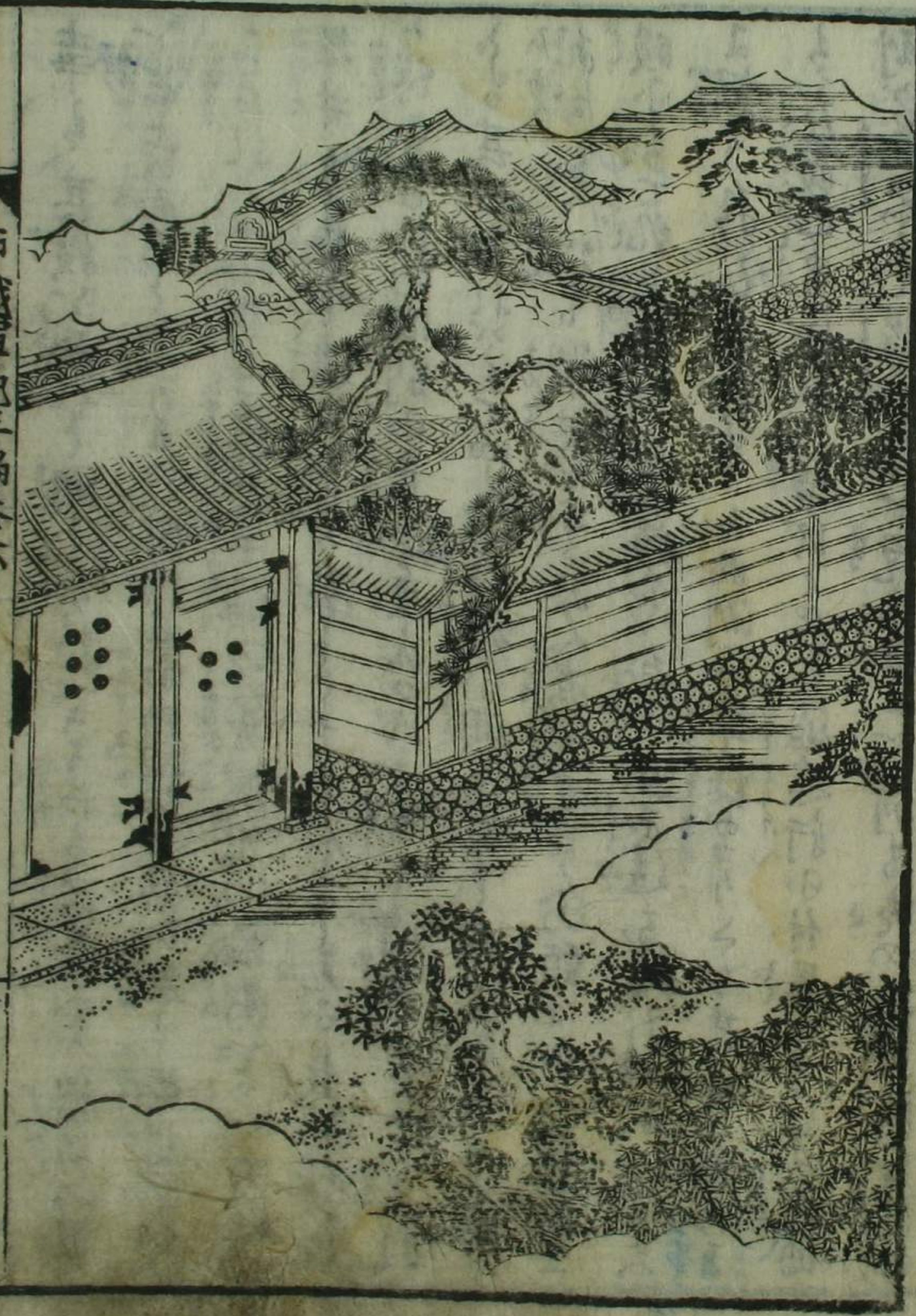
仰ぐれは四人の人も君の士と愛し給ふと感へて
皆軍功と勵み曲測はあからずきものとぞ覺る

落合彦助之事

仁多人と愛するより大あると莫く智を賢と知する大ある
莫く政の独と官小とするより大あるを
河内藤原の俊成に於て雜言せしより後新小横監吏と
長坂源五郎の近にお中より金丸平三郎
又那子日向藤原九郎日向大子三枝若八郎
政事其心なき事郎の如く並に奉て諸の任
民服一策醜と河内投下流と用い給ふべし三軍士おのく

措

と致人車と思ふ時信之の勇士と愛し給ふ中曲測
んや亦も名將の賢と名將の賢と名將の賢と名將の賢と
奉ぐる小横信之の河内舍舟道遠折取の被官小落合彦助と
云つる若あり曲測はあからぬ大膽不敵の強士あり
小仕負殿後の人と對し種々雜言と吐き其日の横監吏へ長
坂源又郎次と金丸平三郎あり長坂を落合が論の亦は當
河内藤原より保く彦助が争論藤原の論断と逐一
上り次小金丸と論断の後して落合が悪言と大將は告
么先長坂がより論断の事とつて其の
平三郎小横信之へ金丸禮と長坂横監吏と愛し給ふ其論断の



五箇箇口川源水

大らあひひこ
 落合彦助
 びしやんどう
 昆沙門堂
 走り廻る



甲越軍言三巻六

事を其役と申し聞し申しにきりしは只落合が雑言の事
 と書上り申し申しにきりしは信云打頭せしめし宛りし
 を申しに落合と百姓が事論の次第理起の論断とる落合の
 振井安藤守進と申し申しにきりしは先小長坂源又即
 が得小吉の問別小吉上り申しにきりしは先小長坂源又即
 とも其任ありしにて四人の歴役小聞し申しにきりしは先小長坂源又即
 申しにきりしは先小長坂源又即
 段小吉にて礼起し申しにきりしは先小長坂源又即
 又怒りしに落合事と曲測は事後ありしに共武の偏り申しにきりしは先小長坂源又即
 きた而申しにきりしは先小長坂源又即
 測が花形と雑言せしと免しと申しにきりしは先小長坂源又即

上と申しにきりしは先小長坂源又即
 こと有べしと申しにきりしは先小長坂源又即
 後先と分別し其場にて討果すべき覚悟と宛めて申しにきりしは先小長坂源又即
 おもひと申しにきりしは先小長坂源又即
 が雑言とたの覚悟と申しにきりしは先小長坂源又即
 大事と有間浦と後揃と活定しと雑言と申しにきりしは先小長坂源又即
 あり武士のありしと有間事あれども候今も侍が頭と申しにきりしは先小長坂源又即
 申しにきりしは先小長坂源又即
 あらん小ら始め申しにきりしは先小長坂源又即
 今度考助が仕舞と申しにきりしは先小長坂源又即
 心中の時と本小と申しにきりしは先小長坂源又即

申

底

申

旗

擲

命

只管

場敷有る者と覺の者とも名人とも習つる曲測と寄免と
 らる旗本家中小まらば分國中に諸侍への礼儀ありし
 実や彼落合彦助の分小有べきと心得願ふ所
 言絶へらば又懲のふ落合と擲捕る者殺せ其後事
 者等が渠は荷贖とるありば又等の者まで擲められ
 將大將擲回十郎を捕束とた法門二人のみ人龍三人と考す
 られやがて落合が宿願を遣はしり
 落合彦助仙海法印の命と事
 落合彦助が明友の者共御殿の以方と早く聞くと彦助が
 くれは落合大は仰天と天と細く地小踏とる小不かく迎れ

下

宛

向ふと知り此への御殿の侍係と頼と命一と助とを中
 昆沙門堂はまろの頼り仙海法印と頼り小頼とるれは退
 のくも流石寺も諸邊に落合の母の七十と信ると擲捕
 り執ふ此仙海法印と頼東川越の名知識とて時信と
 侍係とるく遙く呼連と昆沙門堂に任侶ありしが信
 かく落合小頼れ移しと實覺山の勝覺院妙王寺に妙
 音院とるく三信御殿小頼れと御殿にりく信
 云も三信の信小力を彦助が命と助とれ家弟知新と百放
 これぬ諸將諸士是とて積つと大將とる信
 巻と思怖せり

名將の思もとる通の者と異ありと付て一語あり或

日蓮聖人三編卷六

七

一字
下い

時時信公こうごん 覬近の人々とよなき 夜後ありし時緒園の大将の
 別くわい 怯賢愚の論ありし時臨部大炊かまへおかのい 今川治部
 大輔とよ 義元の治法とありしおのり 器用ある大持たもち けいひと上下威
 どみ由よし 中なか 以時信公ときのぶ とれいとの操まさ ありあ 器用きよう ごとごと 尋たづ
 終へおひ 臨部大炊おかのい へへ 神楽かぐら かんどありし時此小いりてここのち 下と
 るべきとくく思ふよかゞ馬と場ばや 仕人小い腰物ここのち と下さる
 るやあごんの掛か せるとるふあしも遠とほ ごと腰物こしもの と場ば なる
 中皆器用ちゅう ありあ ばふいと上下じやうご 等とら ひとやれば時信ときのぶ 公
 又笑またわら せ終ま へいこれが何として器用きよう ごとありべきとまの器
 用者きよう ごととるべきと下くが積つみ の外ぐわい かと号ごう べきと思ふあふと
 小神こがみ とあつるいときとるべき者もの と人ひと にかまゆき一費ひとひ 文ぶん 也なり

X
敵

621

あらせ其人ひと よも深ふか れ物もの と下くだ さるま りなと取と り治ち 法はふ 法はふ ごと
 其者そのもの 小ら金子かねこ あと深ふか 山やま は取と りせごとと相あひま 闘う けた大おほ 好このち
 法はふ ありあ 敵たて と取と り合あ 小こ 必かならず 定ま り此この 地ち へ出い くと思おも へたへ出い ごとと
 敵たて 小こ 骨ほね と折を りせ又また 出い るとあるを敵たて の思おも へたへいい つかも軽かろ
 上うへ 出い る勝利せいり と敵たて の物もの あり待まち 搦な へるとるをを 出い くと何なん として
 勝利せいり と成な るべきと動うご 別べつ 器用きよう ごととる者もの とも不ふ 器用きよう
 の者もの 呂りよ 中ちゆう 分ぶん 別べつ ごととる者もの とも各おのづか 別べつ の九く 時とき ごと武ぶ
 士し とるもの外ぐわい ごととる者もの とも積つみ られぬが本ほん の大おほ 好このち ありと作たく
 くれくれ 聞き 入い 者もの 大おほ 好このち の意い 智ち 小こ 感かん 法はふ せり
 服

長坂原ながさか 又また 前まへ 落合おちあひ 車くるま

世よ 及およ 落合おちあひ 房ふさ 助すけ 三僧さんそう の徒た くと命いのち へ助すけ ると小こ 軍ぐん 七なな 十じゅう 小こ 鐘かね あり

甲越軍記三編卷二



甲越
山崎
川
舟
水
舟

そら
谷
平三郎と
福らふ岡



甲越
山崎
川
舟
水
舟

老母と取巻られしありし道遙軒の内意として三僧と相違り
 うへ三僧より又出頭し長坂大夫の尉治部大炊介の内儀で
 ろし小房助助令小間もかく老母の事申出さんもいづれ責
 てん又六十日程さう中宿(き)として十日申もさるる不ふ老母の
 助の事と若くは死にうしう小房助も本意あり事より所
 此後落合が年輪交際の事と長坂源五郎掃早し時信公小吉
 後金丸平三郎と落合が雑言の次第と若くは落合が論議と
 身経後へ平三郎と横監吏の事小いへ論交の事と其後と
 見く身経後へさしゆは此後横監吏と付らる事と曲測が
 ありし歴の彼と對し悪言とせし時と其後ととも對しあり
 行りて判断あり難に其意は盡る彼ありは源五郎が利は

て一本役と閣々沙汰の事と昔條を分別する平三郎其仁
 ありし時と對し小房助ありし時と源五郎怒りたる折
 ありし時と對し長坂源五郎寛助と折れ耳て
 中殿の事ハ沖波も秘流小房曲測は年をありし其直
 此事ともかたは浦者小房ありしと作りと令丸平三郎
 雑言の度と悪搦小房言したる程と今程と臆病者の搦
 ありし時と對し沖波ありし我ハ父子の執成とせども令
 丸が雑言とせし時と對し今めの上と果され老
 母の死も是皆令丸が毒舌小房の成あり考殿いふふ意
 趣のありて箇程申せし平三郎は憎むと三僧は免せられ
 分命に助るとも平三郎君の例は悪搦と告

甲越 623

とよき明季に至るべし御免に大事小及びきき事ぞと瞞たけ
 且は智急法さき後助渾身は汗と流し憤怒胸間を繕く
 頭腦は迷上り満面紅ら後進と揃り大息一某一点も金
 丸に對してを礼と出さる事覺あし何事の恨有て某と
 強言せしど娘あはれ我に對し去るさふたはかくして毒舌と
 勃と早眩者の上け意難母の態言金丸が首と弄とあさ
 どんば男更あはれと確くし怒りれば長坂を謀あは
 可くん程うど悦びんか
 落合彦助金丸平三郎と討事
 落合彦助と長坂を瞞れ己が短と願う事終つて一途
 金丸平三郎と恨み現る所金丸平三郎と侍居の士あはれい
 一成

夜津鍬は直宿して大将のたむ小侍一々が懐信云々毎夜
 戌の刻より亥の刻まで一時の間持佛堂に入参ひく者経讀誦
 ありたる間用の事あはれ此間と得る父が許し降り亥の刻は
 津鍬小侍の仲は長坂落合母あはれせられ彦助大は悦び
 夜は戌の刻より平三郎が父の家小侍不逢中不悉んで得
 ひたり公平三郎も爰小も志かば十月廿八日の夜大将の者
 經の閑は父が許し至り早二更の鐘と聞くと芽ち小者一人
 は挑灯と持せ道と急む津鍬小侍も路程二十町餘あり
 其半遠小坂屈曲し樹木道と遮り雪いたる後積り歩行は
 艱々たる不へ待被るる落合彦助ありとこ本は陰より響り
 出平三郎が背後より落合彦助と世程の意類覺えよといふ

甲辰軍記三編卷六

三

倒す
倒す
倒す

またたの肩先とすと斬る平三郎を得たりと抜合せ三四合お
合しが彦助は烈を討て二脚三脚却退せし金丸が運や
うりりん積雪は足場安定もどされが岩後平三郎が本
履の鼻結切きて飛散碎易ふと彦助付込ぐま向と打割る
流る血眼中小入る潤く車柱はざれば働自在もさる車意も
落合の為は切倒され構じり金丸平三郎一葉白ぬの下は
泉下の鬼とどあうりり金丸が小者も主と助人ももせ
半次とて金丸が家小侍り此中と告られ金丸筑紫大は登
餘り控へ馳至と催書と早速電して方と知らればと空
を掃りりり此中晴信を聞せ珍い惚死落合が仕業あり先達
渠と殺ととりしと助け至るが妹念ありと巖後平三郎と

入敵

孫へも元來分國は匿るべき操るれば定て強州の今川お州
の小田宗子中至りちん物れも彼両家と此比を車にて備り
此者ととも國小に入せし四國の三好と大身と此も遠路おれ
お中ト宗子と小徳國の長尾家とまうおん間者と入せ
まは果して彦助長尾家小あの中南珍ひて大は惚死珍
くともあは彦助斬と討てあかん者中一差の解衣着と場
へき中と強部大炊介長坂た清門の命と愛小井荒川新之助村
井久之助といつ浪人此比武田家小あり仕わけ者武造の聞
ち飛ざれども伶俐倭弁此者して強部長坂が晴信の弟のよた
知く此両家小竹禮の式いと籠居の人とぞ致する車大方
ら出頭の家く小まう迎へる雲と此強部大炊介が父

甲斐軍記三編卷六

廿四

田
七



あつらひいふ
荒川村井子
両士傍の
考助が首
實驗入園

田
七
三
六



車と一段程棄る奉る仕る者として不便と思はる者之能言と村
 事荒川村井が挿と沖鷹形の内と又百貫丸の事
 此車と暫く沖合のり重なるの沖沙汰小あさるべくゆ
 先へいふ其子細と沖當家と横田備中と原義濃守小
 幡山城守多田三八山本勅助の又人の勝てる足利大將乃由
 他の家小多くありあると人もよく存知の者あり其山本勅
 助小人姑の百貫の知小て百貫ていありむ其頃信濃國
 も漸十分が一ありてい沖小あさるはさう一時帝あれた斗の
 沖知小と下さる車と一段程の沖車と今と合せの事あり
 といへとも世は落合二人計とある千貫の沖知小いふ小其上
 落合が首として持帰るいへとも世はさう熱甚しく頸腐焼て更

上庸

又真偽とささげ侍の虚言と有間あるは得共世荒川
 村井が為人とありむは才覺者として自分へ沖用おささ
 振中せとも曾根孫三郎依常源又郎三枝吾八郎あんと
 の壯者か時とありいへ荒川村井へ至極の軽之活者としてめも
 沖茶よれ者の友へ西へさ致し又時追さ致せし人も沖茶
 悪く成ると圓と逢うては遇さうとも存視と仕り人の
 足本とさう侍の由取沙汰仕人の肺病とさう侍のうで筒孫
 其を挿仕ささ致し沖圃合せ有る知小と綴るべきくと誅け
 止げ勝信の實りて先知小の事と沙汰を共れ引物
 ささる綴るうら後川中合戦の切紙落合彦助と掃
 和泉守が備中有り落合彦助是迄ありといへて夜物見

辨神

す

中洞の形に似て其沖思ふべき由と申す時信安孫の其
 後を思ひ當り我若年の時より又信虎又悪かれ種々危難
 又遇ひ近年長尾の大鉄と雄雄と争ひ其上上野國と平井
 人と此いふ小水澤氏原を以て今川義元取持して頼れ是
 とも妨られて上野國と取る事な得ざる是其三部と豊とと
 計り違つて日中以後虚益あるとあれ時信入道一ツ天命と
 思ふべし我もて雄雄の志もあつ其故如何とあれ二箇の上上
 の位とてさる古の家と悉く亡く漸く武田家滅亡の時
 小も廻りありあんと覺ゆあり當家々新羅三郎義光よ
 子代々方業と取る事と家勢と落さる連綿と家と時信が代
 又當り國家と失人事と未代の恥辱すは勝た事と古の平お

甲越軍記三編卷下

廿八

訂正

△其部日中見計

武田大膳太史時信は雄野友之車
 天文十九年十二月二十日武田時信は旗をへ沖入有て足利より
 呼越孫ひ一挑首屋所例所の當松菴北兩傍と互れ本卦を
 出され見合つ後の事と知るべし
 落合が沖備をく集つて名乗しと侍人團夜逃とあり名と
 更々他國へ去り匿る落合廿荒川村井が車へ世書の手は
 出され見合つ後の事と知るべし
 往得疑疾有る者
 見計 往得疑疾有る者
 天文十九年十二月二十日武田時信は旗をへ沖入有て足利より
 呼越孫ひ一挑首屋所例所の當松菴北兩傍と互れ本卦を
 出され見合つ後の事と知るべし
 武田大膳太史時信は雄野友之車
 落合が沖備をく集つて名乗しと侍人團夜逃とあり名と
 更々他國へ去り匿る落合廿荒川村井が車へ世書の手は
 出され見合つ後の事と知るべし

訂

出武田備近く呼びしは勝信も荒川村井小助らよりと
大木懐り孫の兩人を右捕へき方作ありしれ共荒川村井ら
落合が沖備へき多うて名案しと侍人圃夜迎とあり名と
更々他國へ去り匿る落合荒川村井が軍へ出善の志は御々
出され見合し後の事とあり

武田大膳太史勝信孫孫之軍

天文十九年十二月二十日武田勝信は旗をへ沖入有て足利より
呼越孫ひ一挑首座行例所の當松菴此兩僧と互れ本卦を
孫孫の兩僧あり君の本卦へ豊よりてを耳しき御生と
とて以ども六三の辭よき豊其鄰日中見計 往得衰疾有子
孫殺吾者ありと云うをより以是を吉あり共吾以後虚益あり

す

甲 29

自來

と中洞の孫れは其沖思ふべき由と申す勝信は孫ひ其
後を思ひ當り我若年の時より又信虎又悪しれ種々危難
と遇ひ近年長尾の大敵と雄雄と争ひ其上上野國と手入
んと思ひ小水澤氏原をたふと今川義元取持して頼れ是
とも妨られて上野國と取る事な得ざる是其三郡と豊よとと
云ふ違つと日中以後虚益あるとあれは勝信人道一は天命と
思ふべし我もて孫孫の志もあり其故如何とあれは一箇の世に上
の侍と云ふ古に家々悉く亡く漸く武田家威その時
おも廻りありとんと覺ゆあり當家と新羅三即義光と
も代り方業と取し事も家勢と落さば連綿する家と勝信が代
は當り國家と失人事と末代の存存は勝信事と古の平お

日武田史三編卷六

廿

國清盛を疾く深く身命と惜みて出家入道して世傳信の天道を
 思れ家名實加の爲に入道せん云々中々人間の定命六十歳と謂う
 然るも日中二十歳して後の三十年日中以後あり人と
 思ふあり三角あり我甲州の遠鄙に居住して君は仕へざる事も
 ありして宿位昇進とせん事其思れありとて出家入道の事
 とありて奏聞と經て大僧にても進むべし是の等の意と以て信
 信雅髪をせんと思て又其奥意を窺ふ時世人の初め又
 信虎君を廢去とあり自ら自去して國家に侍る事不孝の罪万
 人に傳へて流傳何との事あり道々不ありんや論語の聖人の全
 言めて孝道と以てなるとはれ秋十八歳より以後終に論語を
 手解る事あり是不孝の過つと思ふ故あり御世に父へ乃

思れあり早入道と爲人事を和の兩僧と執つて其去函と
 考ふべしと作られ挑首を懸る當松菴と八幡とあり其
 日下某君と執りたりと西方合して大に古事の名ありしと信
 義従有て小松大和守と使者として京都に登り三條の中將
 實綱朝臣と以て奏聞と渾む天文二十年二月十二日於申の刻武
 田大膳大夫兼信濃守暗信入道出家し孫に徳栄軒と号し道
 號を撰山法名を信玄と付孫に晴小年三十一歳に唐土に
 て臨海義玄吾朝の関山重玄の玄の字とて長湯
 の岐秀和尚号け奉らせらる授小僧と皇都より勅使下向
 有る信玄小僧の宣下ありて法性院大僧正とぞ申す世傳
 法体作付られ別髪ありん中々原義濃守虎胤入道して清

63甲
越



暗信
剃髮
之圖



あ

岩と号し山本勳助晴幸と道鬼と号し是と号し竺の道の
鬼神ありとて信玄自ら号け孫小幡山城守虎盛日意と
号し長坂左衛門尉と号し徳宗多弾正忠幸隆二徳宗

一字下

信玄と事小佛法中帰依し孫の岐秀和尚は系禪あり永保
九年正月元日より元龜三年中七十年の内に入清僧に
かく薩摩港頂あり後昆沙門堂と御建立有て秘密をも
専らよみおされ天台宗とて善海法印万蔵院西楽院
中院正覚院と云うての善性法印山宗敬有て論義と独
闡あり沖之提の家とて禪宗妙心寺園山流りて御を
世間叡川和尚春國和尚仙山和尚速信和尚其外後醍醐

あけこう

此とあるはさこの山本

あ

後山南化高山の長老と帰依せし甲州信州にて寺と
遣はされて住持せしめ孫は本朝にて千人の学者と事
を至上とし事今追聞を三好修理太史今天かつの支
配する者も其法あり我祖の名折あり其母の
千人の江波と云うて至上法堂の檀那あり信玄ありき
とて中々山丹後守中作付られ曹洞宗大益とて山傍江波
首とてあつち和尚とて知識又信州岩村田あり江波
ありとて至上と執り孫ありまねども事お作られん久き禪と
未だの事あり武士の家お生る者も軍配とせしめ
せざれば勝負相論ありありありありありありありあり
系とて又又とてありありありありありありありありあり

信がたのりの中曲測左方弟の三科肥前守廣津卿左弟の
 三人を深く信里が軍事中より以て信里が居間中入て結んと
 されぬ救多の侍女等旁集り是とてしめておらるる信里被
 友の令あり居間に入事と抽あめとて妻等とてちてしめておらるる
 教て破る孫あち支ま曲測眼と怒り一程程又公一に婦人共
 救垣が迷うて諸軍の情と起しむ今中もあれ救多が危き
 事累印のめれも皆汝等が為業あり連侍女と突飛し孫二郎
 酒宴しる中中酒色中弱く軍事と直る直とて思ふ
 孫れは仕女短島の信里大お怒りて棄汝等が留めぬの直を救
 あんど是と知るんや林おと破りて夜酒席と妨るへ偏中杖と慢
 物とより出る不あり早く退去せんと物言せと刀柄極よ

信里の御

七二

信里と信里の國と取廣げ家と起と社武の業ありと
 惟る和尚兼務和尚の美見して出陣前中々三本と考
 と取らせ當封の守なきへつのも系流有て出陣ありあり
 投垣信里と破訪那代被放事
 信里中投垣孫治郎信里と信訪の那代して信里二百五十騎
 と後へ信訪中ありりりり信訪の近隣中居あがり軍事と治め
 信里の諸士と慢り信訪して共信里あがり日夜酒色と考
 して更中居る不あり城の中中女と直き居間の遠く人の
 出入る事と抽あト直夜遊樂の中中一りり信里は信里
 くと眼と痛し誠後又心と考る不あり信里が教と防の謀略
 とありと信里の諸士是と起り信里は信里の終方あり信里

信里の御

七二

朝

佳夕

とつれ曲別歎笑ひ他人へも有某直へ御父強河を版の被支ま
 幼おけ時恩と當れへ其子のる能と美とと能西目六看を其て能
 へも助する小粒目も覺と危意と云る氣毒よよ斬ら切給和信
 上を若泉とて強河を版中流せんと眼と膝で動せざれば板垣が
 被官の若池までたお方と宿とれなり孫二郎も膝で程八組氣中も云
 くれ若つづつ元小守して酒色は濁りぬ絶の諸士も信里が為状と
 眼とつら信云云風聞強ひ信里が為作と怪と疑ひ二月廿八日酒
 粉の郡代と故ら上ととと板垣と甲府より案長坂方基門入道
 として酒仿とどまらしめ給ふ

繪本甲斐軍紀三編卷之六畢

伊三

一



